

4 洗者聖ヨハネ天主堂

宮津市

天主堂の中に入ると、濃いコバルトブルーや深い緑、赤のス
テンドグラスを通したやわらかな光線の中に、びっしり四十四
枚の畳が敷き詰められています。ロマネスク風のアーチ型天井
を、石のがっちりした礎石に組み込まれた十六本の支柱が支え
ています。宮津市宮本五〇〇の「カトリック宮津教会」です。

創建は、明治二十九年（一八九六）五月六日。明治村へ移され
た河原町三条教会と長崎の浦上天主堂とならぶ、優れた明治中期
の建築です。正面の十字架像をはじめ五像、祭壇、祭具、壁面の
十四枚銅板画も、フランスから百四年前にはるばる船で運ばれて
きました。貴重な信仰の象徴であるだけでなく、すぐれた文化財
でもあります。柱の黒光りするケヤキは、天橋立のむこう丹後半
島の、細川ガラシャ夫人ゆかりの地の原生林から伐り出されたそ
うで、ひんやりした感触が年輪を感じさせます。あおくとドーム
天井のアーチは、十字架とノアの箱舟を形どって荘厳さをただよ
わせています。和洋折衷なのに、すこしの違和感もなく、しっと
りした教会のたたずまいを今に伝えているのは、宮大工さんやア
ーチの湾曲に腕をふるった船大工さんの苦心の深さでしょうが。

この天主堂を建てたのは、フランスから布教のため来日した
ルイ・ルラーブ神父です。リヨン市近くの農村に生まれたルラー
ブ神父は、二十八歳のとき日本へ赴任します。京都河原町三条教

会でヒリオン神父の助任司祭をつとめ三年間、日本語を学んだ後、
若狭、丹後、但馬へ出向くのですが、石を投げられたり、かすか
すの迫害を受けます。やっとたどりついた宮津の旅人宿「ふでや」
のあるじが、なんの偏見も持たずに泊めてくれ、教会用に家まで
借りてくれたのがこの地との縁のはじまりでした。「外国の宗教
教団には売らぬ」とがんばっていた地主の田井五郎衛門さんが東
京で咯血し倒れました。結核菌の発見者コッホの高弟、北里柴三
郎博士の「養生園」で療養しますが、在京のビグルス神父に洗礼
を受けたあと「元氣になりました。」「感謝のしるし」と田井さんは、
教会の家と隣の下駄屋さん、写真屋さんともども千七百平方メー
トルの敷地を無償で寄付しました。田置村は、それまで全村が日
蓮宗だったそうですが、この田井さんの入信で丹後地方のカトリ
ック教会がはじめて生まれることになりました。今も百余世帯、三
百五十余人の信者が、ここを献身的に守っています。

憲法の基本的人権には、思想、良心、学問、一切の表現の自
由とともに、宗教の自由があげられています。ひろやかな信
仰心でキリシタン弾圧前の細川、京極時代から、さらに「マリ
ア観音」、「マリア燈籠」などを拜んだ自由人の歴史が、脈々と
つながっていたのかもしれないね。

（平野一郎）



洗者聖ヨハネ天主堂

メモ●「洗者聖ヨハネ天主堂」は、KTR宮津線宮津駅より西へ徒歩5分